朽ちせぬ橋はしら

古渡橋

むかしより其名かはらぬ古渡り　さても朽ちせぬ橋はしら哉

飛鳥井参議雅経が鎌倉に行く途次、詠んだ歌である。建久２年（1192）源頼朝が鎌倉に幕府を開き、京と鎌倉との間を多くの人々が往来するようになった。京と鎌倉の旅程は、『東関紀行』『十六夜日記』などによれば、16､7日間かかっている。江戸時代に入り、東海道が開かれるまでは、鎌倉街道が官道であった。

鎌倉街道は、小栗街道とも呼ばれている。閻魔大王によって、この世に餓鬼の姿で送り返された小栗が、車に乗り、人々に曳かれて、藤沢の遊行道場から熊野湯の峯まで旅をする。その様子が説経節「小栗判官」で歌われる。

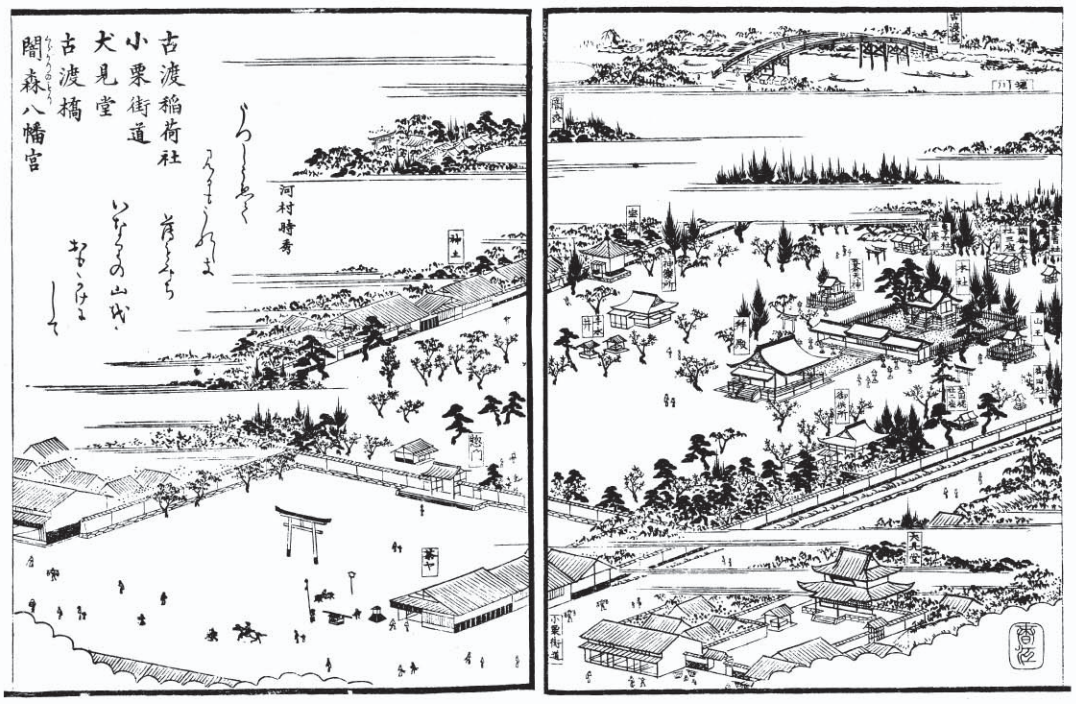
三河に掛けし八橋の、蜘蛛手にものや思ふらん、沢辺に匂ふ杜若。花は咲かぬが実は鳴海、とうこの地蔵と伏し拝み、一夜の宿をとりかねて、まだ夜は深き星が崎、熱田の宮に車着く。車の檀那御覧じて、かほど涼しき宮をたれか熱田とつけたよな。熱田大明神を引き過ぎて、坂はなけれどうたう坂、新しけれど古渡、緑の苗を引き植えて、黒田と聞けば、いつも頼もしこの宿や。……

鎌倉街道は、甚目寺の萱津、中村区の東宿、米野を過ぎ、中川区の北一色、露橋を通る道だ。国道19号と市道山王線の交差するあたりに、犬御堂があった。往時、犬御堂と山王稲荷社の間を鎌倉街道は通っていた。そして、大喜、高田へと続く。

『新古今和歌集』の選者のひとりである鎌倉初期の歌人、飛鳥井雅経が、江戸時代に堀川に架橋された古渡橋を渡ることはない。歌に詠まれた古渡古橋の位置について、『新修名古屋市史』は、次のように述べている。

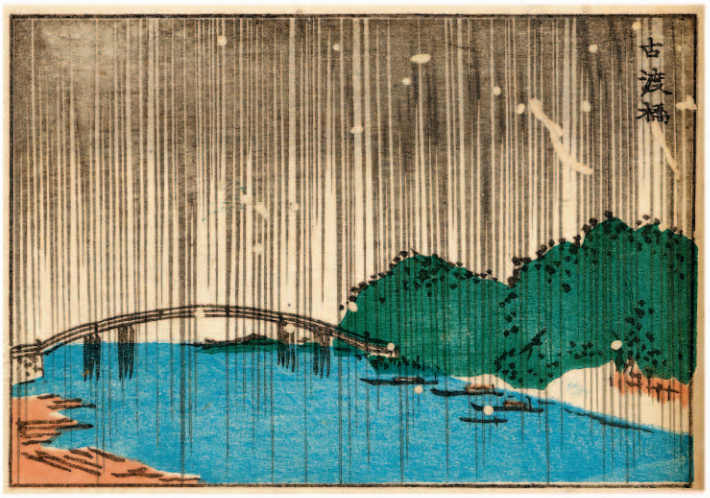
古渡の中心を往時の「古渡橋」と考えたとき、中世の古渡は、今日の古渡町や古渡橋よりおよそ0.5～1キロメートルほど東側やや南寄りの、熱田台地の東の縁から急に低地に降り立ったあたり（葉場公園付近）ということになる。ここに鎌倉街道が東西方面に通っていたのである。

江戸時代、堀川に架った古渡橋は「是は闇の森の西にあり。此街道は海東郡の人東本願寺へ往来多く、今は人家数戸造立せり」（『那古野府城志』）とあるように、東本願寺に詣でる人が多く通る橋であった。



小栗街道（右下斜めの道　小治田之真清水：鶴舞中央図書館蔵）

昭和初期の古渡橋（名古屋都市センター蔵）



雨の古渡橋（名区小景：鶴舞中央図書館蔵）

竣工後の古渡橋（名古屋都市センター蔵）